

NIEニュース

エヌ・アイ・イー



Newspaper in Education

第104号
2024.7.15

●特集・探究と対話を深める NIE ～新聞で学ぶ多様性▶1～3 ●NIE 学習効果調査／フラッシュニュース▶4～5 ●新聞の「今」▶6 ●NIE アドバイザー紹介▶7 ●〈NIE でいきいき〉〈NIE あれこれ〉▶8

©2024年 日本新聞協会

編集・発行 一般社団法人 日本新聞協会 TEL: 03-3591-4410 (NIE担当) FAX: 03-3592-6577 e-mail: nie@pressnet.or.jp

〒100-8543 東京都千代田区内幸町 2-2-1 日本プレスセンタービル

[https://nie.jp] [https://www.facebook.com/Nie47]

特集

探究と対話を深めるNIE 新聞で学ぶ多様性

予測困難な時代だからこそ、自ら課題を見つけ、他者との対話を通じて解決する力を身につけるため、探究学習の充実が求められている。NIE 全国大会京都大会実行委員長から新聞を活用した探究学習についての考察を、小中高の先生から実践報告を寄せていただいた。

予測困難な時代に必要な力

8月1、2日に開催される第29回NIE全国大会。京都大会のスローガンは「探究と対話を深めるNIE デジタル・多様性社会の学びに生かす」である。各学校では「総合的な学習（探究）」の時間を中心に、各教科でも探究的な学習が盛んに行われている。「予測困難な時代」だからこそ、受け身ではなく、自ら主体的に判断し行動できる力が求められている。教科等の「見方・考え方」を働かせるには、「教科書の内容を理解

する」に留まらず、そこから自ら考えて意味や意義を考えたり、対話や協働を通じて知識やアイデアを共有して新しい解や納得解を生み出したりすることが必要である。新聞が「目の前の解決すべき課題」を示してくれるとすれば、教材としての価値は十分にあると言える。

京都ならではの全国大会に

公開授業や実践発表は、校種のバランスとともに、できる限り京都府内各地の学校に依頼するようにした。多様性を重視し、特別支援学校やインターナショナルスクール、小規模校での実践も入れた。さらに、大会のロゴマークを京都市の高校生に考案してもらうなど、「オール京都」でさまざまな学校が参画で

きる大会を目指した。

実践発表では、教師による発表だけでなく、子どもたちの発表や卒業生との対話など、従来とは違う形式での発表も行われる。参加される方とも「探究と対話」を深めていきたい。

また、双方向の意見交流が可能となる「ポスターセッション」部門を新設した。参加者は短時間で多くの実践を見て回ることができ、少人数で自由な協議ができる。発表者も、より多くの参加者から意見を聞くことができる。

特別分科会については、地域でのNIEの普及、市民参加のきっかけになるものにと考えてきた。なおかつ「京都らしさ」をどうしたら出せるのかという観点から検討した。

一つ目は「京都のNIE史」と題し、初日のパネルディスカッションとのつながりを持たせた。1980年代以降に日本で

広まったNIEだが、それよりはるか以前に京都で行われていた新聞活用教育に着目し、NIEについて、その原点から改めて考える機会とする。

二つ目は、子どもの社会参画の一つの形として、京都の各地域で広がりつつある「子ども新聞、子ども記者活動」をテーマにする。子ども記者自らが、さまざまなスタイルの記者活動を紹介し合い、ネットワークを作るきっかけにもする。

NIEのあり方問い直す

NIE全国大会は、開催地にとって一大イベントである。大会をきっかけに、開催地のNIEの裾野をさらに広げ、実践を活性化させたい。同時に、「NIEはどうあるべきか」を問い直す機会でもある。「とりあえず新聞ありき」ではなく、新聞の価値を問い直し、教育効果が認められることに焦点化して実践することが重要である。全国から参加される方々と、新聞とNIEの可能性について議論を深めていきたい。

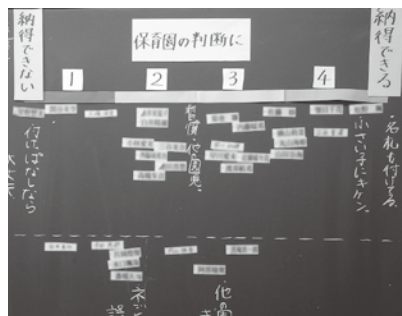
異なる考えを尊重する大切さ

長岡市立越路小学校
主幹教諭

坂井 一

本校では、多様な価値観を知り、考えを深め、相手を尊重する態度を育むため、道徳科で新聞を活用した授業を行った。

4学年（近誠教諭）では新聞記事「これって、アンコン（アンコンシヤス・バイアス）？」（朝日小学生新聞2023年5月9日）を活用。導入場面では、事前アンケート（「男子がピンク色の服を着ていたらどう思うか」など）の結果を発表したり、別教材「子ども大統領」（内閣府男女共同参画局）や、自分の考えを視覚化する「心のものさし」を使ったりして、男女に対する自らのイメージを確認した。「（男女どちらでも）別にいい」「違和感がある」と両方の意見が挙がり、この『もやもや』が何かを考えることにした。



園への納得度合いを「ものさし」で整理

展開場面では、記事の気になる文や言葉に線を引き、交流した後、日常生活の中のアンコンを考えた。ある児童は、記者の取材に「女の子は優しく、男の子は元気で体力があるなど、表情や口に出していたかもしれない。性別ではなく、私らしさを大切にして過ごせばいい」と改めて思った」と答えていた。

心のものさしを使い議論

6学年（丸山穂香教諭）では、母国の風習からピアス着用を求める親と、安全面への配慮からピアス着用を許可しない保育園側の二つの立場が書かれた新聞

記事「園児のピアス 風習でも駄目？」（神戸新聞19年10月7日）を用意。導入場面では、「ピアス着用が認められなかった」との事実のみが書かれた部分を最初に読ませ、その段階での園への納得レベル（心のものさし）をワークシートに記入した。その後記事の全文を読み、親と園それぞれの考えを整理したうえで、再度納得レベルを記入した。

盈進中学高等学校
教諭
上山 朋子

「探究」で引き出す生徒の可能性

広島県福山市にある本校が中学校独自教科「読書」を設けて今年で33年目になる。中学3年間の前半で心を育む「集団読書」、後半で各自の課題解決を図る「修了論文」に取り組むプログラムは、17年目を迎えた。さらに高校の必修科目「探究」を中

展開場面では、園長の立場ならどう判断するかを班で話し合わせた。両者の立場に立った発言があったほか、自身の経験に基づいて話をする児童も見られた。また、「ピアスをしていたら、他の子どもたちから何か言われるかもしれない」など、記事には書かれていない立場について考えを広げる姿も見られた。授業後の振り返りでは、「相手の意見を否定せずに、まずは受

学の全学年に設置し、「読書」「探究」の授業を通して重層的な問題解決能力の育成を目指す。「読書」では書籍を、「探究」では各学年の学びに応じたNIEを積極的に取り入れてきた。そこで今回は本校の探究活動の集大成とも言える読書の「修了論文」作成過程で新聞を活用する実践を試みることにした。「修了論文」は各自のテーマに沿った疑問について仮説を立てて検証するもので、3冊以上

け入れることが大切」「違う意見を聞くことで、一人で考えるときよりも考えの幅が広がった」などの発言、記述が見られた。教科書で学習する「異なる立場の人の考えを尊重すること」の大切さに気づき、実際にどうふるまえばいいのかを考えたり、その難しさを感じたりできた。また自らの考えを主張するばかりではなく、多様な意見があることに気づくことができた。

の書籍利用と取材や実験等のフィールドワーク実施を課している。全教職員がサポートし全校を挙げて取り組む。その際大半の生徒が苦戦するのがテーマ設定（中学2年生3学期）である。ICT環境が整い、タブレットによる情報収集の速度と量は高まったが、課題そのものを見つけたり視野を広げたりする点では脆弱さが否めない。そこで2021年度よりSHR（ショートホームルーム）に「問え悩め」という時間を設けた。HR担任がその日の朝刊を用い、瀬戸内海のプラごみとい

特集 探究と対話を深める NIE ～新聞で学ぶ多様性

やさしい日本語で多文化共生

兵庫県立伊川谷高等学校
主幹教諭
福田 浩三

2022年12月末時点における在留外国人は日本人口のおよそ2・5%で、この割合は今後増加が予想される。このため在留外国人とのコミュニケーション作りや、災害時および就学等における言語面での支援の充実が急務である。そこで本校では、コミュニケーション類型の1年生30名を対象に、在留外国人との意思疎通に効果が期待される

つた社会問題から宿題の意義など身近なもので生徒に発問する。生徒は担任からの問いに頭を悩ませ考える。そして生徒たちもこの「問え悩め」の出題を年に数回担う。日頃から広く社会への問題意識を持ち、興味関心を広げるといふ活動を通じ、自身の課題発見にも大いに役立

テーマ設定と情報共有

フィルターバブルから脱却し一覧性と網羅性という新聞の強みを生かすため、紙の新聞でテーマやその関連記事を探す時間を設けた。興味関心がゲームや漫画、ペットや部活動という限

「やさしい日本語」を授業に取り入れ、生徒の多文化共生・国際理解への意識付けを行った。対象の生徒は前段階として、新聞記事を利用して外国籍の子どもの就学問題やSDGsについて学習した。次に、新聞読み方講座により新聞の持つ網羅性・一覧性・信頼性について理解した上で、各自が複数の新聞から興味・関心をもつ記事の一つを選び、夏季休業中の課題として新聞感想文コンクール応募に向けた感想文を作成した。このとき使用した記事を、後に「やさしい日本語」への書き換え講

定的な世界で生きる中学生にとって、新聞の広角な世界は新鮮だったようだ。「がん」を選ぶ医療系志望の生徒、「AI」に飛びつく工学好きの生徒にも、その先にどんな問題があるのかを新聞は示唆してくれる。全員がテーマを決めた上で共有し、再度新聞記事探しをする座でも活用した。

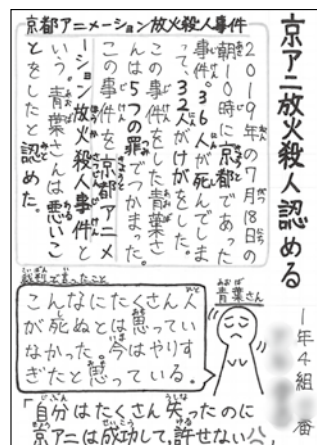
はがき新聞で伝わりやすく

2学期の初めに外部講師と協力して「やさしい日本語」に関する講演会や書き換え講座を行うことで、在留外国人とのコミュニケーション手段としてだけでなく、母語である日本語について生徒と共に考え直す機会をもった。その後、実際に「やさしい日本語」を用いて、各自が選んだ記事をはがき新聞へまとめ直す作業を行った。この作業は班内での意見交換やICTの活用により行われた。生徒は日常的に、はがき新聞を制作する機会が与えられていたため、

とさらに効果的で、仲間のテーマに関連する記事を見つけ出す生徒が現れた。昆虫食をテーマに選んだ生徒が食糧危機や環境問題の解決につながる培養肉の記事を見つけて、牛肉のおいしさをテーマに選んだ生徒と情報共有するなど予期せぬ展開も見られた。新聞になじみのなかつた生徒たちの中にも記事から新たな視点を得て、テーマ設定だけでなく論文の中身にも活用する者も増え、論文の充実度が一層高まった。生徒たちの興味関心を掘り起こすことは生徒たちの可能性を引き出すことに他ならない。NIE活動の未来はここにありと実感している。

このまとめ直しにおいても単なる文章の書き換えにとどまらず、A5サイズという制約の中で、より深く内容が読み手に伝わる見出しや文言、レイアウトとなるよう工夫した。

はがき新聞の完成後、班内発表を経て、各班の代表者5名が全体への発表をした。この様子はNIE公開授業として、外部の教育・国際交流・出版関係者33名も参観し研究協議を行った。



見た目も工夫したはがき新聞

生徒は「やさしい日本語」が日本語を母語としない他者や小さな子どもとのコミュニケーションのみならず、日常的なコミュニケーションにおいても互いの意思疎通を深めるのに役立つことを理解した。後日、「やさしい日本語」の学習により多文化共生に興味を持った生徒4名が、学びの実践のため、在校生の多数が外国籍である地元夜間中学校を訪問。在校生と一緒にすごろくをする中で、「やさしい日本語」を意識しながらルールやマスにある指示の説明を行った。こうした交流により、確実に生徒の多文化共生・国際理解への意識が深まると実感した。

NIE学習効果調査

実践効果の具体像を検証

新聞協会NIE委員会は、このほど、「NIE学習効果調査」の結果を発表した。調査は、2024年1～2月にかけて実施。NIEを実施する教員に、NIE実施後の教員自身の指導力、児童生徒の学習面の力の変化について尋ねた。また、具体的にどのような力がついたのか、寄せられた多くの自由記述回答から分析した。

調査は、新聞協会の23年度NIE実践指定校、NIEアドバイザー（新聞協会が認定する実践経験が豊富な教員）が在籍する学校などを対象に実施。全国の小中高校581校から回答があった。内訳は小学校229校、小中連携10校、中学校185校、中高連携22校、高校・高等専門学校122校、特別支援13校。

調査では、NIEの実践により「教員の指導力」が向上したとする回答が9割を超えた。また児童生徒の力については、尋ねた全ての項目（①聞く力・話す力」「②読む力」「③書く力」「④理解力・考えを深める力」「⑤主体性」）で、伸びたと評価する回答が9割前後に上った（グラフ参照）。

教員の指導力の変化

NIEを実施した後に教員の指導力がどう変化したのかを聞いたところ、「大幅に伸びた」「伸びた」「少し伸びた」と答えた学校の割合は91%だった。

自由記述回答では、「新聞を活用することで教材研究の幅が広がった」「授業が充実し、教科書の学習と実社会の関わりを意識した授業を構成するなどの工夫につながった」とする回答が多く寄せられた。また、教員自身の知識・知見の深まりやメディアリテラシー能力の向上など、教員としての変化や成長に触れた回答も目立った（次ページ「教員の指導力」自由記述回答から参照）。

児童生徒の力の変化

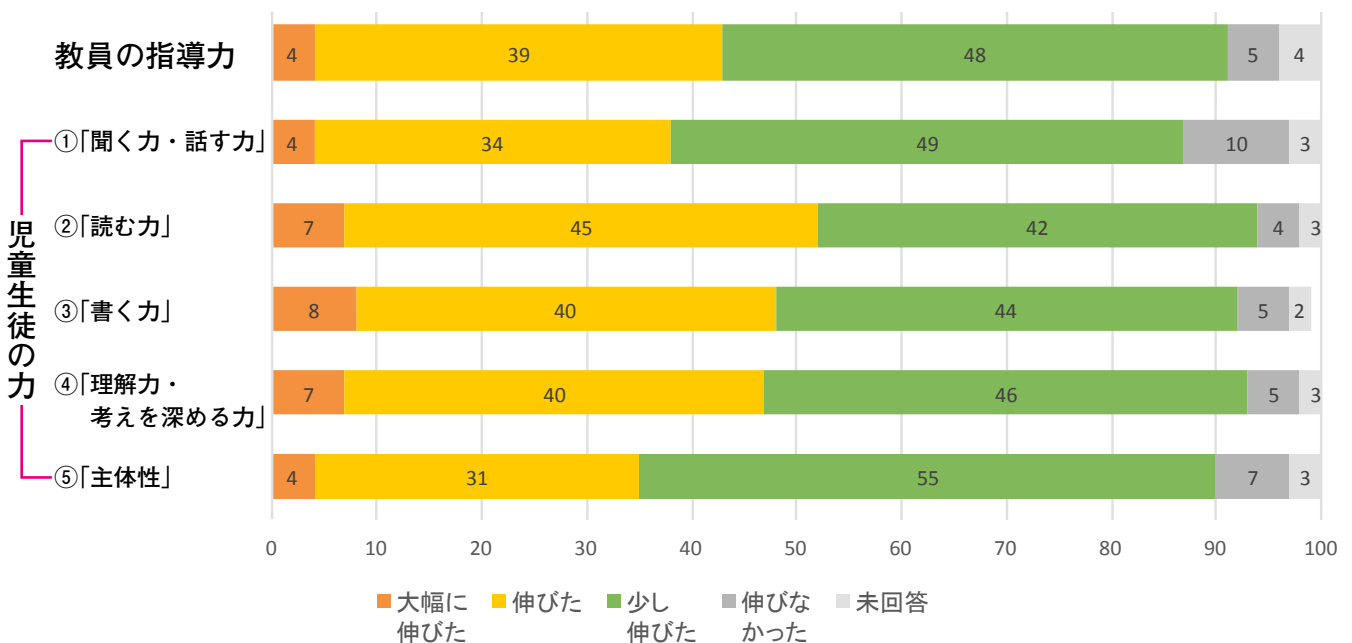
児童生徒の力の変化については、全ての項目で「大幅に伸びた」「伸びた」「少し伸びた」の合計が9割前後に上った（「聞く力・話す力」87%、「読む力」94%、「書く力」92%、「理解力・考えを深める力」93%、「主体性」90%）。

NIE実践による効果が特に期待される「読む力」「書く力」について、具体的にどんな力がついたのか、実践後の児童生徒の変化に関する自由記述回答を分析した。

「読む力」は、「初読の文章でも内容を理解できるようになった」「一定時間に読む量・速さが向上した」「必要な情報を取り出す力、要点を押さえる力が向上した」「語彙が増え、内容を正しく理解することができるようになった」など、読む技術

グラフ 「教員の指導力」「児童生徒の力」の伸びの変化

（単位：%）



※構成比は小数点第1位以下を四捨五入しているため、合計が100にならない場合がある

NIE で先生のかも伸びた！

「教員の指導力」自由記述回答から

- ・新聞の教材化を考えることで、深い教材研究や創意工夫につながった
- ・教科・単元での目的にかなう効果的な活用を考えることで、授業の構成力がついた
- ・タイムリーな事象を扱うことで、学ぶ意欲や態度を育むことができた
- ・社会情勢と教科の学習を結びつけた指導を意識するようになった
- ・進路指導などで、生徒の興味関心分野の情報を的確に提供できるようになった
- ・アンテナを立てて情報収集に努めるようになった
- ・現代社会への知識が深まり、視野や知見が広がった
- ・メディアリテラシーに対する意識が向上した
- ・教員自身が日常的に新聞を読むようになった

が身についたと評価する回答が多かった。また、学習意欲・態度について、初見の文章や長文を読むことへの抵抗感が低くなったなどの回答が目立った。

「書く力」では、「書くスピードが上がり、分量も増えた」「要約や感想を限られた字数、時間でまとめられるようになった」「意見などで文の構成を工夫して書けるようになった」などの力の伸びのほか、記事の内容を根拠に自分の考えを書くなど、表現力が向上したとの回答が寄せられた。学習意欲・態度については、最後まで文章を

書き切る児童生徒が増えたと評価する回答が多く見られた。

実践頻度と力の変化の相関

日常的にNIEを実践している学校と、そうではない学校との間の違いを調べるため、実践頻度（「日常的に実践（週1回以上）」「月に1～2回程度（週2～3か月に1～2回程度）」「年間に数回」と力の伸びの相関関係を分析した。

日常的に実践している学校は、教員の指導力、児童生徒の聞く・話す力、読む力、書く力、理解力・考えを深める力におい

[illegible]

表 「日常的に実践している」
学校の伸び

学校の伸び		大幅に伸びた	伸びた
教員	「指導力」	9 (4)	53 (39)
児童生徒	「聞く力・話す力」	10 (4)	43 (34)
	「読む力」	14 (7)	52 (45)
	「書く力」	13 (8)	48 (40)
	「理解力・考えを深める力」	12 (7)	47 (40)
	「主体性」	8 (4)	41 (31)

※上段は「日常的に実践（週1回以上）」する学校の割合。カッコ内は全体の割合。「全体の数値と比べて5ポイント以上プラスの差が出た数値を黄色に着色

新聞を読み、コメントを書くというシンプルな学習活動の継続が、読み・書きの精度を高めると考えます。

調査結果から、教員の指導力の向上にも注目したいと思います。教員採用試験の倍率が低下し、教員の資質向上が課題となりつつある現状において、NIE実践が教員の指導力向上にも資することが明らかになったことの意味は大きいと考えます。「教員が日常的に新聞を読み、社会の出来事と関連させて授業を進める」ことの重要性を改めて確認することができたのではないのでしょうか。

◆第30回(神戸市)、第31回(広島市) 全国大会日程等決まる

第30回NIE全国大会神戸大会は、2025年7月31日、8月1日の両日に、「時代を読み解き、いのちを守るNIE」をスローガンに開催します。記念講演の講師は作家の小川洋子さんに決まりました。

第31回大会は26年の7月30、31の両日、広島市で開催することが決まりました。

◆24年度実践指定校に527校

新聞協会は、全国のNIE推進協議会から推薦された527校を2024年度NIE実践指定校に認定しました。実践期間は原則2年間。学校のある地域で配達可能な一般日刊紙を一定期間購読できます。購読料は新聞協会と各新聞社が折半するため、学校の負担はありません。

また、14県のNIE推進協議会では独自認定校として計49校を認定しました。

新聞の「今」

新聞の根幹である「確かな情報」を担保する役割を担う「校閲記者」。情報や文章の正しさのみならず、読者の目線でも記事を精査する。「現代日本語のプロ」によるチェック方法や専門性の高め方、心がけを寄稿いただいた。

確かな記事支える校閲の仕事



読売新聞東京本社
編集局校閲部
岡 直樹

新聞社の校閲の仕事は、一言
でいえば記事をチェックするこ
とだ。

チェックといってもさまざまな
作業がある。誤字・脱字がな
いか、文と文のつながりはおか
しくないか、慣用句などの言葉
の使い方は適切か。

これらの基本的な項目に加え、
記事の事実関係が正しいかも確
認する。地名・人名などの固有
名詞に誤りはないか、過去の出
来事の発生年月を取り違えて
いないか、金額や距離を表す単
位は正確か――。グラフや地図
が掲載されるときは、目盛りや

縮尺が適切かにも気が抜けない。
漫画のせりふにも目を凝らす。

記事に見出しがついたら、そ
の内容が本文と合致しているか
も確かめる必要がある。多くの
視点から確認を重ね、日々、紙
面を送り出している。

ミス防ぐテクニクを駆使

校閲記者はしばしば「最後の
とりで」と称される。ミスを防
ぐ部門として、いくつかのテク
ニクを駆使している。

「参加することに異議がある」
とあれば、異議は意義かもしれ
ないと同音異義語を疑う。「着
る」「来る」の2語は普通なら間
違わないが、「きて」「きた」と活
用されれば誤変換の可能性が生
じる。文法の知識もものを言う。
「コミュニケーション」(コミ

ュ、が正しい)の誤植を防ぐた
めには、単語を眺めて終わりに
せず、「コ」「ミ」「ユ」と1字
ずつ押さえていく。人名を間違
えないために、菊池さんを「キ
クイケ」、菊地さんを「キクト
チ」とつぶやいたり、佑・祐・
裕を「にんべんにみぎ」「しめ
すへんにみぎ」「ころもたに」
と字を分解したりして確かめる。
一方、校閲記者は「最初の読
者」でもある。

新聞は若者から高齢者まで幅
広い年代の人が読む。したがっ
て多くの人が読みやすい表現に
なっていることが大切だ。取材
する記者は専門的な知識をもと
に原稿を書くが、読み手はその
分野の記事を初めて目にする場
合も多い。抵抗感を抱かせる
文章になってしまっていないか、
読者の立場でチェックすること
も校閲記者の重要な役目だ。
読みやすい紙面にするための
決めごともある。細かい例では
「EU」「日銀」といった頻出語
でも最初から略語にせず、初出
箇所は「欧州連合(EU)」「日
本銀行」としている。

漢字だらけの文章も読みにく
さを生む。新聞で使われる漢字
は常用漢字表内のもが基本だ。
「美しい」「嬉しい」などの表
記は日常生活ではなじみがあり
「おいしい」「うれしい」と読め
る人が多いかもしれない。しか
し常用漢字表にない字や音訓は、
紙面では基本的に平仮名で書か
れる。難読語を使わざるをえな
い際にはルビ(読み仮名)を振
るようにしている。

特定の世代にだけ通じる流行
語、業界用語や専門的な表現も、
誰にとってもわかりやすいもの
とはいえず、言い換えなどの提
案をする。毎日原稿に触れてい
る人には見慣れた表現でも、初
めて記事を見る人がストレスな
く読めるか、想像力を働かせる。

蓄積とリセットの難しさ

校閲記者の専門性はどのよう
に高められていくのだろうか。
言わずもなだが、新聞には政
治、経済、事件・事故、スポー
ツなど色々な記事が載る。全て
の分野に精通することは難しい
が、ニュースに接し、確認作業

をする日々の仕事を通じて、一
定の知識が蓄積されていく。

加えて、さまざまなジャンルの
言葉に触れることが刺激にな
る。小説にも、漫画にも、流行
曲の歌詞にも魅力が詰まってい
る。そうして言葉について自ら
の頭で考え、疑問があれば手間
を惜しまずに辞書を引き、調べ
ものをする一方で、専門性が磨
かれていくはずだ。

ところが校閲歴を重ねていて
も、うっかり「シェースクピ
ア」を見落としそうになること
もある(ストクが逆)。経験は
間違いない力になるが、知って
いる、わかっていっているという油断
が思わぬ見落としを生む。蓄積
を怠らない一方で、毎回リセッ
トした謙虚な気持ちで原稿と向
き合うのが、重要で、難しい。

身の回りには情報があま
りに多様で、誰もが自ら情報を発
信できる時代だ。そんな今でも、
新聞は多くの人に信頼できるメ
ディアと認識してもらっている。
先人が積み重ねてきた努力を継
続し、信頼を守っていくことに
力を尽くしたい。

NIE アドバイサー紹介

- ①学校名（所属等） ②担当教科 ③NIE 実践歴
④新聞を活用するうえでの工夫を一言
（敬称略）



●宮城県

齋藤 萌奈

（さいとう・もな）

- ①宮城県一迫商業高等学校
②国語 ③2年

④ICTの良さ（気軽さ・検索しやすさ）と紙の新聞の良さ（思いがけない記事との出会い）を、状況やねらいに応じて生かす。



●宮城県

丸山 仁

（まるやま・ひとし）

- ①宮城学院中学校・高等学校
②社会 ③5年

④新聞を手にする機会、様々な記事を読み要約したり感想を書いたりする機会をつくること、そして継続していくことが大切である。



●茨城県

松山 龍樹

（ひやま・りゅうじ）

- ①茨城県教育研修センター企画管理課
②小学校全科、中学校技術・

家庭 ③12年 ④身近な場所に新聞を常設して興味・関心を持たせ、朝の会等での記事紹介で、情報収集や表現する力を育む。



●茨城県

小神野 雅幸

（おかの・まさゆき）

- ①行方市立麻生小学校
②社会 ③6年

④授業での活用では、子供が出来事を身近に感じられる記事を選ぶよう心がけている。新聞の奥深さ、楽しさに気付かせたい。



●茨城県

時杉 博人

（ときすぎ・ひろと）

- ①岩瀬日本大学高等学校
②地歴公民 ③28年

④新聞は「教科書と今をつなぐ格好の教材」である。世の中の出来事に関心を持ち、社会の課題を自分事として考える生徒を育てたい。



●岐阜県

安藤 隆一

（あんどう・りゅういち）

- ①瑞浪市立陶小学校
②社会 ③17年
④NIEの日常化や資料化

（授業での活用）を進めることで、子どもたちに情報を選別する能力が身につくと考え実践を継続している。



●富山県

小櫻 昌子

（こざくら・まさこ）

- ①富山県東部教育事務所
②国語 ③1年

④社会への関心を高める、考えを形成する、表現力を高めるなど、ねらいを明確にして新聞を活用することが大切である。



●富山県

中川 伊通子

（なかがわ・いつこ）

- ①富山県東部教育事務所
②国語 ③1年

④社会への関心を高めるとともに、他者との交流を通して、様々な考え方に触れたり、考えを広げたりできるようにしたい。



●福井県

腰田 裕之

（こしだ・ひろゆき）

- ①福井市灯明寺中学校
②社会 ③11年

④新聞は情報の宝宝箱。正確な情報は学校・家庭・地域をつなぐ。PTAの方々にも生徒に新聞記事を紹介していただいた。



●大阪府

増尾 美恵子

（ますお・みえこ）

- ①太成学院大学、近畿大学、羽衣国際大学
②社会科教育法（地歴公民）

③20年以上 ④新聞は情報が目に飛び込み、学びに新たな事象を与えてくれる教科書。新聞で現代を分析すれば未来も読めるはずと考え指導している。



●兵庫県

高野 剛彦

（たかの・たけひこ）

- ①神戸市立科学技術高等学校
②地歴公民 ③約20年

④高校教員にとって負担が大きく、教材や指導過程をそろえにくい「総合的な探究の時間」への新聞活用を提案している。



●岡山県

岸本 浩一

（きしもと・こういち）

- ①岡山市立南輝小学校
②全科 ③19年

④新聞に触れる機会を多くもち、自分の考えを書いたり話したりする表現活動の充実。友達との意見交流を通し、思考を深める力の育成。



●鹿児島県

山之内 勲

（やまのうち・いさお）

- ①鹿児島市立谷山小学校
②国語 ③5年

④新聞を通して子供同士・親子での対話を促し、子供たちが考えを共有したり実社会へ目を向けたりできるようにしている。

第15回いっしょに読もう！新聞コンクール募集中

新聞協会は、気になった記事について家族や友達と話し合った上で、感想や意見を書いて応募するコンクールの作品を募集しています。小中高校生（高専含む）が対象で、締め切りは9月9日（月）必着です。学校などの団体応募も受け付けています。ぜひ取り組んでみてください。

応募方法や過去の受賞作などの詳細はNIEウェブサイト（https://nie.jp/month/contest_newspaper/2024/）をご参照ください。

こちら▶





本校では自律した学び手の育成を目指し、5年生の社会科で「社会的事象を自分事として捉え、主体的に追究する児童の育成」をテーマにNIEを実践してきた。「情報産業とわたしたちの暮らし」では活動内容として、身近な地域の記事の活用や、実際に新聞づくりに携わる人から話を聞き、記事を分析することを位置付けた。

まず、本校のことが載った新聞記事を提示すると、「身近なことが書いてある。他にも面白い記事はないかな」と興味を持つ様子が見られた。その後、新

事務局長から一言

デパート、ホテルが建ち並ぶ名古屋随一の繁華街を学区に持つ栄小学校。再開発で新しい高層ビルが次々建ち、新聞に地域

聞を読みながら、新聞をつくる人の工夫や努力について予想した。「記事がたくさんあるから、さまざまな人が協力しているのではないかと自分事として捉

え、話し合いを始められた。次に「新聞社によって記事の内容は違うのか」との疑問から、同じ日の複数の新聞を読み比べる姿が見られた(写真上)。「実

名古屋市立栄小学校

教諭 清水 亮佑

◎愛知県名古屋市／校長・松山 清美／生徒数・184人
◎特色「夢中になれるものを見つけよう!自分からDO!」を最上位目標に、児童主体の学校づくりを進めている。令和5年度よりナゴヤスクールイノベーション実践校。生活科や総合的な学習の時間を核とし、自律した学び手を育てる実践や、中学校と校区内の2小学校で連携してキャリア教育の推進に取り組んでいる。



新聞を読み比べる様子



講師に質問する児童

の話題が載らない日はほぼない。

同校は全校で児童の自己決定を尊重した探究的な学びに取り組む。過去に新聞にも載った、樹齢300年余の校庭のイチヨウを起点にした調べ学習では、

「インターネットで調べるだけでなく、地域の人に話を聞きたい」と子供たち。近隣のホテルに相談すると、学校のギンナンを使ったキー作りを提案され、社会とのつながりが生まれた。

際に働く人に話を聞いてみたい」という意見も出た。そこで中日新聞社のNIEコーディネーターを講師として招き、記者の仕事や新聞発行までの過程におけるさまざまな工夫や努力について話を聞いたり、質問したりした(写真下)。

その後、調べたことや聞いたことを基に、新聞記事のどこに工夫や努力が表れているかを分析した。「見出しは一目で分かり、興味をもってもらいやすいように工夫している」「正確な情報を伝えるため、何枚も写真を撮ったり、メモをしながら取材したりしている」などの分析結果からは、これまでの学習を生かして主体的に追究する姿が見られた。

今後も児童が新聞を効果的に活用する実践を行っていく。

社会事象を自分事として捉える力をつけたいと実践校になった同校。新聞を窓に、さらにいろいろな発見をし、世界を開いてほしい。(愛知県NIE推進協議会事務局長・遠藤健司)



長野県NIE推進協議会の事務局として、研究指定校(日本新聞協会認定の実践指定校と県推進協会の独自認定校を合わせて呼ぶ)を訪ね、年間の取り組みや公開授業の方針を聞いて回っている◆先日担当教諭と新聞の活用法について意見を交わしていると「児童数に対して部数が足りず、一斉に取り組むのが難しい」と指摘された。同様の話をよく聞く。そんな問いに、こう答える。「その日の新聞でなくてもいいんです。学校が購読する新聞、先生方が自宅で読む新聞を捨てず集めて活用してほしい」◆確かに紙のニュース媒体としての新聞は時の経過で鮮度が落ちる。しかし、「情報の宝」としての価値は決して古くならない。情報との出会い、「知らなかったことを知る」驚きが児童・生徒にとって大切——と自身にも言い聞かせるようにアドバイスしている。

(信濃毎日新聞社・佐藤秋彦)